

第二回大会記事

本会第二回大会は、去る六月七日、弘前大学文学部において、以下の如き要領で開催された。

○研究発表会（凡そ〇〇—二〇〇） 於11番教室

（題目・氏名は要旨と共に後掲）

○総会並びに懇親会（二・〇〇—三・三〇） 於会議室

○スライド映写（三・三〇—六・〇〇） 於12番教室

(1) 旧倉館式土器と稲作について—工藤正氏

(2) 岩木山麓湯の沢遺跡・葦師遺跡の発

掘状況と出土遺物——発掘参加学生有志

当日は全会員の約六割ほどの参加を得、和気暖々の中にしかも学会らしい雰囲気は終始し得たことは御同慶の至りであった。ことにスライド映写を担当された工藤正氏には、文字通りの繁忙の中を割いて御準備頂き、また当日も長時間にわたって懇切な解説を御願いした。氏の御好意に対し厚く御礼申し上げる次第である。なお、今後は原則として年一回、初夏の候に開催したいと考えている

研究発表要旨

◎ 近世津軽地方の交通

（本号に論文として掲載）

金木高 佐藤 仁

◎ 安永の弘前藩刑法—寛政律との比較—

黒石高 張名庸一

I 構成（全48ヶ条）

1 主君之者御仕置

10 条

2 親殺之者御仕置

8 条

3 人殺御仕置

23 条

4 火附御仕置

2 条

5 牛馬盗人之御仕置

6 条

6 盗賊之者御仕置

16 条

7 博奕致候者御仕置

4 条

8 謀害謀殺し候御仕置

7 条

9 相対死之者御仕置

3 条

10 喧嘩致口論候者御仕置

6 条

11 立帰者御所脇道忍出入之者御仕置

5 条

12 盗仙之者御仕置

3 条

13 盗津出之御仕置

2 条

14 隱田輝之著御仕置

1 条

15 公華前訟強訴御仕置

2 条

〔寛政律は項目別、条数別〕

Ⅱ 性格（特色）

1 封建社会の特徵である身分秩序を維持しようとしてゐることは両書同様である。

2 寛政律に比し、網羅的でなく、法三章的である。

3 体系化されていず、自由裁量の余地が多い。

4 それだけ彈力的でよい面もあるが、專断に流れたことも予想される。

4 通則的規定がない。

5 刑が一般に寛政律に比し重い。

6 安永の規定にあって、寛政律にないものがあるが、適用例が少ないことなどを理由に条文が整理されたものと思われる。

7 文化年向に寛政律は整備されるが、その先駆的なものとして、立法の過程を知る上に重要である。

◎ 所謂「課役論争」のわが古代史

理解に及ぼす影響について

弘次 虎尾俊哉

この課役論争というのは決してこと新しいものではないが、殊に近年東洋史学会をにぎわしているもので、唐の税制に於ける課役の意味についての論争である。

即ち、一般には課Ⅱ租・調、役Ⅱ庸・雜徭と理解されており、これが通説となつてゐるのであるが、これに対して曾我部静雄博士は課Ⅱ徭、役Ⅱ庸という新説を強力に主張されて、この両者はまだ結着を見ないのである。

今、この両説の是非を直接論ずることは、門外の国史研究家としてのつゝしめ度いと思うが、しかし、わが律令制が唐制を継承して成立したものであり、ことにこの「課役」の語を含む律令の条文依始と日唐律令の間に差違のないことを思えば、この論争がわが古代史理解の上にも影響を及ぼして来ることは避けられないので、

その点について若干の指摘を行って見度い。たゞし、わが律令に見える課役の語は、当時、課Ⅱ調、役Ⅱ庸・雜徭として理解され、また實際にもこの通りに施行された。これは課Ⅱ雜徭説の曾我部博士も認められるところである。従つて、この東洋史学界に於ける課役論争は、實はわが律令税制の制度的内容を理解する上には殆ど影響はないのであつて、眞の影響は、何故わが国では課Ⅱ調としたかという点、即ちわが律令制定時に於ける立法者の主体的意圖及び客觀的条件を如何に理解するかという点に現われて來ることとなる。